

京都学派の総帥 西田幾多郎の哲学(その1) 西田哲学・旧制高校—センチメンタルジャーニー—

上川北部医師会会長 中村 稔

——本稿は名寄短期大学道北地域研究所「地域と住民」第20号(2002年3月)の再掲に追補したものである。——

1. 教養の喪失

私は美深町で生まれ育ち、昭和23年4月、旧制名寄中学4年修了で北海道大学予科に入学した。貧しい時代だったが、札幌の人達は心やさしく住みよい街だった。

「今、経済再建が日本の政治的課題として声高く呼ばれているが、それと並んで、いやそれよりも大切なことがある。それは教育問題である。恐るべき少年の非行が続出し、一方でエリート集団である筈の中央省庁の精神的腐敗が指摘される時に、今一度教育の問題を根本的に考え直すことが必要である。現在、改めて戦後と戦前の教育を比較してみよう。戦後の教育が劣っているといっているのではない。只、戦後の教育に欠けているのは何かに言及したいのである。戦後の教育には、戦前の教育に存在したよきものが失われたのは確かである。それは旧制高校(北大予科も含む(筆者註))の消失である。旧制高校はマッカーサーの至上命令として殆んど論議されることなく消失させられた。旧制高校生は言葉で表現すれば、弊衣破帽で、朴歯の下駄を履いて“デカンショ”を歌っている姿である。デカンショは、デカルト、カントとショーペンハウアーで、歌はこのように哲学を論じて半年暮らし、あとの半年は寝て暮らすという意味だとまことしやかに語られたのである¹⁾。北大予科でも同様だった。出席はとるが形式だけだったし、学生達はどこの教室でも出入り自由だったのである。「旧制高校の3年間にあったのは、例えば、立前だったとしても、実利を否定し、真理を追究し、教養を重視するノブレス・オブリージュ形成期だったのではないのか。かつての日本の指導者達は、ひとときにせよ、その様な教養とか、真理とか理想という言葉は何よりも大切に、或いは大切であると見せ掛けなければならなかった

3年間を過ごしたのである¹⁾。

又、小室直樹は、「新制東大生と旧制一高生の意識の違いは明らかである。国を自己の双肩にかけて立つというノブレス・オブリージュ意識は、じつに、自己の特権を正当なものと認め、それを一般に誇示し、世間もそれを認めるということからはじめて発生する。ノブレス・オブリージュを欠いた者からは、“汚職意識”しか生まれまいであろう²⁾」と言う。桜田淳は旧制一高の寮歌にある「治安の夢に耽りたる榮華の巷低くみて」の感覚の喪失が戦後教育の欠点だったと書いている³⁾。戦後の平等教育—悪平等と言ってよい—からみれば幻想・アナクロと思われるかも知れない。しかし、“自由・権利”や“平等”という観念は、或る意味では、フランス革命の結果もたらされた幻想の一種といてよいし、それが薄められた型でアメリカンデモクラシーの基本となり、更にその蒸留水が日本の戦後デモクラシーをつくり、“結果の平等”、“秩序のない自由”、“義務を伴わない権利の拡大”となった流れを私達は、今再確認すべきであろう。いずれにしても現代からみれば無駄と思われるかも知れない3年間がマッカーサーによる戦前教育の一方的否定によって消失させられたのである。それは、日本の降伏条件違反だといつてよい(いずれ稿を改める)。しかし、特に甚だ誠実な教師は、数多く退職し(約11万人)、理由があいまいのまま約5,000名の教師が追放された。両方で25%強といわれる。又一方では国家主義教育を否定するあまり、徹底した無謬性を確信するマルクス主義という新しい教育理念に飛びついた、といつてよい。その流れは既にマルクスが幻想だとわかっている現在でも日教組—北教組と続いているではないか。短期大学でも一部に残存しているではないか。例えば、困難ではあっても、かつての良き伝統

を新しい時代にふさわしいように再現しなければ、日本の再生は更に遅れるのではないか。更に、“教養”とは「自己抑制」を学ぶこと、「常識」を身につけることだ、を私達は今、再確認しなければならないであろう。

当時、旧制高校生の必読書といわれたのは、西田幾多郎の『善の研究』、阿部次郎の『三太郎の日記』、倉田百三の『出家とその弟子』、漱石や芥川、ゲーテ、ヘッセ、マン、ドストエフスキーなどだった。私は下手の横好きでデカルト、パスカル、カント、マルクス、ニーチェ、キルケゴール、道元、ジッド、ブルースト、リルケ、カロッサ、カフカ、ウルフ、四迷、荷風、白鳥、藤村や花袋などの私小説作家群、堀辰雄やアプレ・ゲールといわれた作家群を乱読した。現在の私に残っているのは、ただ、書架を偶々みる時、青春への淡い想いしかない。それは、私にとって、センチメンタルジャーニーとしか表現できないのではないか。

2. 西田幾多郎

私は、精神神経科の医師となり精神病理学を専攻したいと思っていた。そのためにハイデッガーなどの哲学書を読むことが必要だといわれていた。西田幾多郎、キルケゴールが恰好の材料だった。当時の表現でいえば、ヘーゲル・マルクスの過程的弁証法に対し質的弁証法・垂直弁証法つまり、人間存在の深淵に迫る方向だった。そして西田だけが哲学者として完璧なまでに人間存在の根底に達したのだったのである（稿を改める）。その他、ヤスパース、クレッチマー、フロイト、ミンコフスキーやユングなどを読んだのが懐かしく思い出される。

西田幾多郎は、明治3年（1870年）石川県で出生。哲学者を目指して旧制四高に入学したが、最終学年の時、それまで自由だった学風が、文部省の方針で規則づくめの武断的学校に変わったのに反抗して同期5名と退学となり、独学を目指したが限界があり節を曲げて、明治24年（1891年）東京帝国大学文科大学（現在の東大文学部）の選科に入学した。しかし、エリート養成を目的とする東大で選科生の地位はみじめだった。そんな中で西田は図書館の閲覧室で読書することを禁止され、廊下に並べられた机で独学にはげみ、明治27年卒業する⁴⁾。卒業後は旧制高校の教師をしながら、“真の生命＝自己”を求めようとする彼の苦闘はすさまじいばかりだった。「真正の自己」を求めてそれ程苦闘を続けた思想家は明治以後彼の他

には見出せない⁵⁾。やがて、「善の研究」の素案を哲学誌に発表した翌年（明治44年）、京都帝国大学文科大学（現在の京大文学部）哲学科の助教授として招かれ、翌年、『善の研究』を発刊した。それは“日本における最初の独創的哲学”⁶⁾と評され、「西田哲学は『急速な近代化に由来する混乱と焦燥のなかで、日本における“近代的個人”の精神的基盤を求めて出発した哲学である』⁷⁾。

『善の研究』は大正デモクラシーの哲学的基礎である⁸⁾と言われた。

西田は『善の研究』後も“真正の自己”の根拠を求め、三木清が言う強靱な思索力を駆使して到達したのが“場所の論理”の発見だった。それは、アリストテレス以来ヨーロッパ哲学の基本である“主語の論理”から“述語の論理”へのラディカルな転回であり、左右田喜一郎によって初めて「西田哲学」と固有名詞で呼ばれた論理だった^{5) 9)}。ヨーロッパ哲学の先入見を超えたものであり^{5) 10)}、三木清はユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への移行と同様の“コペルニクス的転回”だと書いている¹¹⁾。

西田が京都大学に赴任し、翌年主任教授に就任すると、『善の研究』を読んで啓発された俊英が全国から哲学科に入学し、西田も多くの哲学者を招いた。それは例え自分と考え方が異なる哲学者であっても、真理を真摯に追究する学者群だった。西田の哲学科が京都学派と呼ばれ、西田は総師と言われたのである¹²⁾。

“場所の論理” — 『働くものから見るものへ』¹³⁾ が出版された翌年（1928年）、西田は定年退官するが、哲学的活動は更に活発化する^{4) 5) 10)}。“場所”は“弁証法的一般者”として具体化され、“真正の自己”は“行為的自己” — “歴史的な身体”と把えなおされる^{10) 11)}。又、マルクスに共感を示しながら対質し、“無の自覚的限定”において¹⁴⁾、個物、時間、身体概念の他に歴史的物質や環境系概念が解明され、“場所”の限定が“歴史的社会的な世界”であることが究明され、人間存在の根底に達することによって（次号で稿を改める）現実の世界の論理的構造を哲学的に究明したものとってよい^{5) 15)}。しかも、マルクスの実践概念に共感を示しながらも対質する概念 — 行為的直観 — を示した。それは当時の日本のマルキスト以上のマルクス理解だった^{5) 10)}。又、人間の行為を労働において世界を把えたのはマルクスと西田だった^{5) 16)}。しかも、“行為的直観”は意識的立場を超えた概念であり、マルクスと共通の哲学的地平に立っ

たばかりか、実践を全体的に把える点では、マルクスを超えたものといつてよい^{5) 12)}。確かに後期の西田哲学は身体の意義を重視し、人間と環境との関係を労働—ポイエシス—と把えた。しかし、個人が身体的、行為的であるならば、人間と人間との関係は、所有と権力、支配と隷従、強制と反抗という諸側面を孕むが、西田は身体的行為を、「永遠の今」の自己限定として、それが絶対的なものと関わる面において把えて、人間の自己疎外を具体的化することを結果として怠り、折角現実の世界の論理的構造を哲学的に究明しながら“心の論理”に収斂してしまった。「現実の歴史的・社会的世界の具体的構造の把握を妨げる一面があったことは否定できない」⁵⁾。又、西田哲学の弁証法は、現実的制度論がないために、現実の世界の論理を“あいまい”なものにしてしまった^{10) 15)}。これは既に戦前、西田哲学完成期に、「現在が現在を限定する“永遠の今”の自己限定の立場から考えられており、そのために実践的な時間性の立場が弱められてはしまいかと思う……」¹¹⁾、と三木清が指摘していた。戦前の京都学派で三木ほど西田哲学を理解していた哲学者はいなかったといつてよい^{5) 10)}。

西田は戦後、マルキストによって、歴史論・社会論の欠点をつかれ一方的に否定された。西田一門の竹内良知は、戦後西田哲学をマルキシズムの立場から理論的に徹底的に批判したが¹⁷⁾、その反省として、「……私はかつて西田哲学を拒否したが、西田は現代という時代が孕んでいる思想的問題を根底から粘り強い思索を通じて、ヨーロッパ哲学を支配していた先入見を突き破り、哲学の新しい地平を拓いた哲学であることに気づいた。」⁵⁾と書いている。又、中村雄二郎によれば¹⁵⁾、西田の愛弟子で最も可愛がられた三木清が友人の坂田徳男にあてて出した最後の手紙には、「今年は西田哲学を根本的に理解しなほしてこれを超えていく基礎づくりをしようと思えます……。とにかく西田哲学と対質しなければ日本の新しい哲学は生れてくるが出来ないように思われます……。」(1945年)とあった。しかしその7ヵ月後、三木は獄死する。それは師である西田が75歳で生涯でも極めて完成度の高い論文—「場所的論理と宗教的世界観」¹⁸⁾—を書いて逝去した2ヵ月後だった。しかし、西田一門で西田の後継者になった田辺元は西田哲学完成期の重要な「はじめ鍵概念」である“行為的直観”を“神秘的立場”と批判し否定したが¹⁹⁾、これは明らかに田辺の誤解といつてよい^{5) 12)}。(稿

を改める) 更に、西田の弟子だった宗教哲学の西谷啓治一門による“西田哲学絶対視”によって逆に評価もされず¹²⁾、三木の提言を確認し、西田の現代性を再提言したのは、東大哲学科卒の中村雄二郎、京大哲学科卒の竹内良知、梅原猛や鈴木亨だった。

中村は、西田哲学の現代性を、言語・自己・身体・場所・エゴとセルフなど1960年代、世界の哲学で問題となったものとの関わりをフランスで詳しく紹介し、自らも西田を超え生かす道を着実に歩んでいる¹⁵⁾。竹内は、西田哲学の限界を認めながらも西田の“行為的直観”の概念を高く評価し、「近代哲学の限界を超える新しい地平を拓いた西田哲学が、現代哲学の新しい地平での出発点になりうるかどうかはわれわれ自身にかかっている。西田哲学は、それを超えようとする時に真価を発揮する。」⁵⁾として若い世代に発信している。梅原は西田を高く評価しながら日本古代を辿り、西田にあった“共生”の概念を発展させ“共生と循環”の哲学を目指している²⁰⁾。鈴木も西田を批判的に超える道を着実に歩みながら独自の哲学を確立²¹⁾、西田と共に日本哲学者としては異例的にキリスト教神学に大きな影響を与えている¹⁵⁾。そして、彼等の働きによって、1980年代になって、西田幾多郎は世界的に再評価され、20世紀を代表する哲学者の一人になったのである。

× × ×

かつて、市立名寄短期大学生が選択科目で『哲学』を選ぶことがあることを知り西田哲学にふれた。しかし、現在、西田幾多郎は日本においても外国人そのものであろう。西田の論文は難渋であるが独特のリズムを持っている。しかも、西田には戦前戦後を通じて女性ファンが多かったのは事実である。上山春平は、西田哲学を凹型の思想とし⁴⁾、中村雄二郎は¹⁵⁾、西田の基本にモデルとしての“女性原理”を初めて見出し、「論理主義のかたちをとりながら、パトスの感性的無意識的側面—モデルとしての女性原理(筆者註)—を多く持っているからこそ独創的な哲学となり得たのではないか。」と論じた。船山信一は「論理ではなく詩を読むように、リズムカルに読めば、メッセージが届く。これが、西田哲学の読者が女子学生に多い所以である²²⁾。」と書いている。

—— 西田哲学と深層心理や精神病理との関わりについては次号で稿を改める。 ——

参 考 文 献

- 1) 梅原 猛『亀とムツゴロウ』文芸春秋社 (1994)
- 2) 小室 直樹『ソビエト帝国の崩壊』光文社 (1980)
- 3) 桜田 淳「この国のエリートをどう育てるか」『正論』扶桑社 (2000.8)
- 4) 上山 春平『日本の思想』岩波書店 (1998)
- 5) 竹内 良知『西田幾多郎と現代』第3 文明社 (1979)
- 6) 高橋 里美「西田氏著“善の研究”を読む」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 7) 古田 光「西田幾多郎の世界」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 8) 出 隆『哲学以前』岩波書店 (1927)
- 9) 左右田喜一郎「西田哲学の方法について」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 10) 中村雄二郎『西田哲学』岩波書店 (1985)
- 11) 三木 清「西田哲学の性格について」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 12) 梅原 猛・中村雄二郎「西田幾多郎と京都学派」『現代思想別巻1号』青土社 (1993)
- 13) 西田幾多郎「場所」『西田幾多郎選集第四巻』燈影舎 (1998)
- 14) 西田幾多郎「私と汝」『西田幾多郎選集第三巻』燈影舎 (1998)
- 15) 中村雄二郎「西田哲学の脱構築」岩波書店 (1987)
- 16) 木村 敏『心の病理を考える』岩波書店 (1994)
- 17) 竹内 良知「西田哲学覚書」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 18) 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎選集Ⅲ巻』燈影舎 (1998)
- 19) 田辺 元「種の論理の意味を明らかにす」『西田幾多郎選集別巻Ⅱ』燈影舎 (1998)
- 20) 梅原 猛『共生と循環の哲学』小学館 (1996)
- 21) 鈴木 亨『西田幾多郎の世界』劉草書房 (1985)
- 22) 船山 信一『日本哲学の弁証法』こぶし文庫 (1995)